

# (一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第74号 (2013年2月28日)

## 定例研究会のご案内

東洋音楽学会西日本支部 第259回定例研究会

日時：2013年3月23日(土) 13:30~17:00

場所：国立民族学博物館(民博) 第6セミナー室

大阪モノレール「公園東口」駅から徒歩15分

※「万博記念公園」駅から自然文化園を通過するルートだと、250円(小中学生 70円)の入園料が別途必要となります。

例会担当：田中 多佳子(京都教育大学)

司会：寺田 吉孝(民博)

### 《講演》

**The Power of *Muheme* Musical Tradition of the Wagogo People of Dodoma, Tanzania: Initiation to Church**

**Kedmon Mapana (University of Dar-es-Salaam, Department of Fine and Performing Arts)**

This paper examines transitions in the social functions of the *muheme* music tradition of the Wagogo people of Central Tanzania. It argues that the musical tradition of *muheme*, with the disappearance of its original social context, is a living tradition - one that has made a transition from the now illegal Wagogo girls' initiation ceremony to its acceptance as a Wagogo *muheme* church

music genre in the Anglican Church in the Dodoma region of central Tanzania (Mapana, 2007). There are implications of this journey for other global music traditions, the socio-cultural contexts of which are no longer viable. Interview quotations from Wagogo cultural-bearers and the literature are documented to support the argument.

※英語による講演です。通訳はつきません。

### 《特別対談》

#### 民族音楽学の草創期——北米と日本

ロベルト・ガルフィアス (民博、カリフォルニア大学アーヴァイン校)  
徳丸 吉彦 (聖徳大学)

1960年代は北米の民族音楽学の基盤が築かれた時代でした。この10年の間に、総合大学の音楽部や人類学部などの中に民族音楽学科・プログラムが次々と設置され (UCLA 1960年、ワシントン大学 1963年、コロンビア大学 1967年、ブラウン大学 1968年など)、その後の主要な研究拠点となっていきました。今回の研究例会では、ワシントン大学に民族音楽学科を創設されたロベルト・ガルフィアスさんをお招きして、民族音楽学の研究対象、方法論などについて当時どのような議論が行なわれたのか、また民族音楽学と関連分野との間にはいかなる交流があったのか、などについてお話をおうかがいします。また、日本を代表する音楽学者、民族音楽学者であり、北米でも教鞭をとられた経験のある徳丸吉彦さんを二人目のゲストとしてお招きし、北米での動向が日本の研究に与えた衝撃・影響についてお話しいただきます。日米の重鎮お二人のお話から、草創期の熱気や興奮を知るだけでなく、学界の軌跡を辿ることによって、現在の内外の研究状況について理解を深め、今後の方向性に関しても大きな示唆が得られることと思います。

\* \* \* \* \*

## 定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部 第257回定例研究会

日 時：2012年7月21日(土) 13:30～17:00

場 所：京都教育大学 D4講義室

例会担当：田中 多佳子(京都教育大学)

### 《講演》

尺八の国際化にみる楽器の分化と音楽種目再編への提案

——国際尺八フェスティバルを中心に(実演付き)

志村 哲(大阪芸術大学)

### 〈要旨と報告〉

今回の例会では、志村哲氏に尺八の国際化に関する最近の動向について講演を依頼した。以下は、上記の題目による講演の報告である。

近年、古いタイプの楽器構造をもつ「地無し尺八」が、国内外を問わず流行の兆しをみせている。「地無し尺八」とは、文明開化以降、合奏に重きをおくなかで開発され普及した「地塗り尺八(こんにち、単に尺八と呼ばばこれを指す)」に対し、虚無僧たちの宗教行為として江戸期に大成した独奏曲「尺八古典本曲」の吹奏に用いられた楽器と同じ製作方法・構造の楽器を指す。ただし、地無し尺八は、現在も虚無僧尺八伝承者のあいだでは珍重され、製作し続けられており、彼らは「地塗り尺八」の使用を好ましくないと考えている。その意味では、今日の尺八界には2つのタイプの尺八が併存しているといえる。志村氏は、かねてからその文化的価値と再評価の必要性を訴え続けてきた研究者・演奏家であり、その第一人者として世界的に評価が高い人物である。今回の講演内容は、氏がそうした広範な研究活動を通じてかかわってきた今日の尺八文化に関する諸問題を、おおよそ4年に一度、各国回り持ちで開催されてきた「国際尺八フェスティバル」および、他の音楽界の動向に照らし合わせて明らかにしようとするものであった。

講演はまず、尺八の種類について、映像資料を併用しながら解説がおこなわれた。唐代に雅楽楽器として伝来した「正倉院尺八・雅楽尺八」

から現代にいたるまでに数種類の楽器の盛衰がみられることが述べられたが、特に志村氏が演奏するオークラウロの映像資料は大変貴重なものであった。続いて江戸期の「普化尺八」以降の「尺八が用いられる音楽の種類とその歴史的広がり」という視点を軸として、「地無し尺八」、「地塗り尺八」という概念の解説がおこなわれ、その前者の音楽の実例として本曲《調子》、《偲（しぬび）》の2曲が氏によって実演された。2曲は異なった長さの楽器で演奏され、しばらくの間、会場は凜とした空気に包まれた。《偲》は作曲家・高橋悠治氏が2007年に作曲した独奏曲であり、現代音楽の世界において、「地無し尺八での吹奏を念頭に作曲された」初めての楽曲である。また、志村氏にとっては「故人を偲ぶ」という心情をあらわす音楽であり、その意味が無ければ（演奏会用芸術音楽とは異なり）演奏することはない、とのコメントがあった（虚無僧尺八の世界では「献笛」と呼ばれる演奏行動が重要視されていることとの共通性を想起させた）。なお、氏の演奏に合わせ、同じく尺八奏者である随伴者がスクリーンに投影された作曲者直筆譜（五線譜に指使い譜と図形が併用されたもの）上の該当箇所を指し示していく形で実演は進められたが、後の質疑応答で、どこを演奏しているかほとんど理解できなかったという意見が出た。報告者は、五線記譜法と実際の地無し尺八による演奏結果との関連性という点で、非常に興味深い事例であると感じた。

次に、本年5月28日から6月4日にかけて京都で開催された「2012国際尺八フェスティバル in 京都」の報告が、配布資料と映像資料を併用しながらおこなわれた。邦楽器のなかでも特に尺八界は国際化の動きが顕著で、外国人演奏家、研究者を多く輩出しており、毎年、世界各国で大小のイベントが盛んに開催されている。ところが国際大会としては、今回が初めての日本での開催にあたり（特に海外から切望されていたこともあって）、国内外より多数の演奏家・愛好家、また10社以上の流派が参加し、1週間をかけて多くのコンサートやワークショップ、楽器展示会、楽器即売会等が連日おこなわれた。これは、ひとつの邦楽器のイベント規模としては驚きに値するものである（なお、志村氏はその中で特に浜松楽器博物館と協力し、「古管」と呼ばれる古楽器尺八および各時代の尺八の展示会、講演会、古管コンサートを企画・担当している）。

また、イベント全体を通して、彼らの強い興味の対象は「虚無僧尺八」に向けられており、諸外国における「禅」文化への評価の高まりと通底している。そこには「吹禅」という言葉に集約された尺八伝承が、精神修養の一環として捉えられ、音楽においても内面性を重視する傾向を認めることができた。

最後に、志村氏よりこの講演を通したまとめとして、ひとつの提案がおこなわれた。それは「三味線の世界においては音楽種目ごとに特化した楽器が使われ、それぞれの芸が極められているのに対し、今日の尺八界は1種の楽器で幾つもの音楽種目を演奏されることがほとんどである。しかし、個々に異なる音色、演奏様式をもつ音楽種目のすべてに適応できる楽器を求めることには無理がある。そこで、三味線のように音楽種目ごとに適した特徴をもつ楽器を選択できるようになれば、演奏家の技と音楽伝承はさらに発展するはずだ。端的に言えば、尺八界も（かつてそうであり、現在も一部の流派ではそうであるように）少なくとも音楽種目としての〈本曲尺八（虚無僧尺八）〉、〈三曲尺八（合奏尺八）〉、〈近代邦楽尺八（新邦楽尺八）〉、そして〈現代曲尺八（西洋音楽・ポピュラー音楽にも対応するスーパー尺八）〉用に楽器を造り分けられるような製作技術を確立して、演奏者、楽器製作者共に、異なった音楽様式を個々に追究する姿勢をもつことが、これからのひとつの方向である」というものであった。さらに「地無し尺八が、古楽器としてではなく、21世紀のピリオド楽器になる可能性が強まっている」、「地無し尺八の使用は、古楽器の現代的活用という枠組みの中で捉えるべきではない。今後、必要性はさらに高まり、21世紀楽器となって普及するであろう」という予言をもって講演は締めくくられた。これらは志村氏が長年、種々の尺八関係機関に所属しインサイダーとして携わってきた経験を通じて述べられたものだけに、事の本質や経緯を明確に示すものであり、邦楽伝統の未来の開拓を志向する人間のひとりとしての意気込みが強く感じられる問題提起であった。

今回の講演は、長年、先端の芸術音楽と日本の古典音楽の間を往還してきた氏、独特の視点から述べられたものでもあり、現代日本の音楽を取り巻く環境に対して、重い一石を投ずるものであったといえよう。

(泉川 秀文 記)

## 《研究発表》

### (1) 近世三方楽所の成立過程

山田 淳平 (京都大学)

#### 〈要旨〉

本報告は、近世日本において奏楽を担っていた三方楽所と称される楽人集団の成立過程を明らかにするものである。三方楽所の成立については、天正～文禄年間に南都方楽人・天王寺方楽人を朝廷に登用することによって成立したとする説明が一般的であるが、その結集や制度的確立への過程は未解明のまま残されている。時期ごとの段階を踏まえて明らかにしていくべきものであろう。本報告では出来得る限り公家や僧侶の日記などの同時代史料に基づいて、当時の楽人の動向を追っていきたい。

当日の報告では応仁の乱から寛文期までの楽人の動向を検討したが、紙幅の都合により、本稿では特に慶長期について述べる。

慶長二年(1597)7月18日、善光寺如来が入洛した。この時楽人たちは騎馬にて迎え入れ、大仏殿において奏楽を行った(『義演准后日記』『舜旧記』)。これは、慶長年間における東山大仏、豊国社を中心とする奏演体制の幕開けを告げる出来事でもあった。慶長三年(1598)8月22日の大仏堂供養には「四部楽人分立」とされる(『義演准后日記』)ように、相当の大規模な楽人が動員された。豊国社が成立する慶長四年(1599)以降は、毎年秀吉の命日である8月18日には必ず舞楽を伴う祭礼が催され、度々楽人が動員されることとなる。豊国社在りし日の『舜旧記』や『兼見卿記』を紐解くと、豊国社への神事に出仕する楽人たちが頻繁に登場する。8月18日の祭礼の他、月に数回は神事に奏楽を供していた。この豊国社に出仕した楽人の具体的な中身については「豊国大明神舞楽人御支配帳」(東京大学史料編纂所架蔵影写本)に詳しい。これによると豊国社出仕の楽人たちには、豊国社領の祭礼料1000石の内315石が充当されており、45人の楽人が支配にあずかっていた。ここには、南都方・天王寺方・京方、更には南都方右方人の名までが記されており、その動員の範囲は未曾有の規模であった。17世紀初頭の楽人集団は、朝廷や春日社・興福寺・四天王寺のみならず、豊国社の楽人としての枠組みも与えられており、豊国社を一つの結集の核としていたのである。

(山田 淳平 記)

## 〈報告〉

山田氏の発表は、中世末から江戸初期の楽人の諸行事への勤仕について、全体を、慶長、元和、寛文期に分けて、同時代の史料から記録を拾い出し、京都、奈良の二方に加え、天王寺方を加えた「三方」楽人の任用システムが成立する過程を実証しようとするものであった。日本史業界の研究者らしく、記録文書からの丹念なデータ収集による実証を目指す誠実な研究であった。ただ、大局的に見ると、すでに平出久雄氏を始めとする歴代の雅楽史の研究者によって指摘され、なかば常識となっている「16世紀後半から17世紀はじめに三方楽所が成立した」という議論の大枠に回収されてしまいかねないテーマで、その意味では、日本史、音楽史双方にとって有益な、新たな知見や研究の方向性を見つけるにはどうしたらよいのかを考えさせてくれる発表だった。

とはいえ、発表の中には随所に興味をひかれるディテールがあった。もっとも興味深かったのは、豊臣政権下、豊国祭の雅楽に勤仕する楽人に対し、上久世村、牛ヶ瀬村内の土地支配権が与えられことを示す慶長六(1601)年の史料の提示であった。史料には、芝、辻、上、窪、東、中、新などの南都系と思われる家名が見えるほか、東儀、藪、岡、林など、天王寺系の家名も見える(京都系の家名は見えず)。ただし、それぞれの人物は官職名しか示されていない。フロアからのコメントでは、個々の個人名が特定できなければ、「三方」の割合がどのくらいであったのか等、実態が解明できないのではないかと、との示唆があった。報告者も、公開論文等においてぜひその点を明らかにしてほしいと思う。この史料は、豊臣という武家政権と雅楽との関係を示す点で重要であるが、ここに示されていることが、後の徳川政権の雅楽、楽人をめぐる動きとどのような関係があるのか、など興味は尽きない。

今回の発表は修士論文に基づくものと推察するが、聞く所によると、氏は、権力と雅楽との関係に注目し、引き続き江戸時代の雅楽、楽人について研究を続けて行かれるとのことである。紅葉山楽人や日光山楽人の実態については未だ不明な点も多い。今後、地道な史料の発掘等によって、私たちの前に新たな知見を示して下さることを大いに期待している。

(寺内 直子 記)

## (2) 近代における人形芝居（非義太夫系）の展開 ——甚目寺人形（説教源氏節）を例に 藺田 郁（大阪大学）

### 〈要旨〉

幕末から明治にかけて、近世に隆盛した人形浄瑠璃文楽とは異なる形で、様々な地域で人形芝居が興り、戦前まで盛んに行われていた。猿倉人形、文弥人形、西畑人形、円通寺人形などである。これらの人形芝居はこれまで概説的な説明や個別の調査報告のような形で扱われることが多かった。発表者はこれらをひとつのまとまりとして捉え直したいと考えている。発表では、そのための大まかな視点として、① 非義太夫の語り（体系化された義太夫節と反する上演様式）の検討、② 地方を中心とした活動の在り方（巡業を主とした活動、および興行的な活動）の検討が必要であることを示した。次に上述の問題の具体事例として名古屋（あま市甚目寺町）に残る甚目寺人形を取り上げ、その成立および展開を説教源氏節との関わりから報告した。甚目寺人形は一人遣いによる操り人形と説教源氏節によって行われる。幕末～明治の初め頃に興り、昭和五十一年まで続いた。明治末から大正のころには、一座を組んで伊勢方面へも巡業したと言われている。説教源氏節は、新内語りであった岡本美根太夫が、当時盛んであった関東の説経節（説教祭文）に新内を取り入れて大阪で始めたと言われ、明治以降名古屋が活動の中心となった。説教源氏節の正本、床本集などの流布状況から、説教源氏節が名古屋周辺にとどまらず、中京圏にまで及んでいたと考えられる。こうした広がりをもたらしたのは、説教源氏節による女芝居である。人形操りとの結びつきもあったとされるが、より盛んになったのは源氏節女芝居であった。甚目寺人形のフシまわしは単純でありながら、一方で曖昧で変形可能な部分も見出せ、そこに女芝居の複雑なフシとの繋がりも見出せる。説教源氏節による人形芝居は名古屋周辺では甚目寺のほかに見当たらないが、甚目寺人形を説教源氏節の拡がりのなかに置くことで、近代の非義太夫系の人形芝居の一つとして捉えることが可能であると思われる。

（藺田 郁 記）



## 〈報告〉

日本の人形芝居といえば、義太夫節による、いわゆる人形浄瑠璃がよく知られている。しかし日本の諸地域には義太夫節で語られない、比較的これまで研究対象とはならなかった「非義太夫系」の人形芝居が存在する。そこで発表者は、非義太夫系の数々の人形芝居を、①活動実態の在り方、②上演様式の検討、という二つの視点によって捉えなおすことを目標にしている。本発表では特に、愛知県あま市で伝承されている「甚目寺人形」を事例とし、説教源氏節の性格について、発表者の丹念なフィールドワークの成果に基づきながら報告・考察がなされた。

まず ①活動実態の在り方について、説教源氏節の成立・展開という視点から発表がなされた。甚目寺人形に関する現存する先行研究や資料は数少ないとのことであるが、それらを精査し、説教祭文が説教源氏節に変容した経緯や、さらに説教源氏節の伝承がどのあたりの地域まで拡がっていったのかを考察した。また、明治期における源氏式女芝居の盛況が説教源氏節の拡がりにつながり、その過程で甚目寺人形が興ったことを述べた。またこれは、説教源氏節の床本が女流源氏節そのものであることから証明できるという。

次に ②上演様式の検討として、説教源氏節のフシ付けとフシまわしについて考察した。唄本集の指南書きからは一見フシが少なく単純に見えるが、発表者はそれを疑問視し、新聞記事の記録、音源からその特徴を再考察した。そこで得られた知見として、説教源氏節はいくつかの似たフレーズが組み合わさった「曖昧さ」を含んでいると発表者は論じた。

質疑応答では、フシの「曖昧さ」という言葉の定義の是非、音源から語り方の特徴についてほかに確認できることはあるか、演者はフシの形について他派とは異なる要素を認識しているのか、などといった点について確認が行われた。

今回の発表は、音楽学においてこれまでほとんど取り扱われてこなかった非義太夫系の人形芝居を取り上げたという点に意義がある。それゆえに、フシの分析などで用いる概念に対して発表者が新たな定義をするという点で慎重にならなければならない。また、非義太夫系の人形芝居を捉えなおすためには、地道な事例調査の積み重ねが必要とされるだろ

う。今後のフィールド調査により、さらなる知見が得られることを期待する。

(松井 今日子 記)

### (3) 近現代における評弾の伝承について——調の分析を中心に 垣内 幸夫 (京都教育大学)

#### 〈要旨〉

発表の前半は、日本でまだよく知られていない評弾について概説した。まず、中国の歴史における近代と現代を定義し、評弾という言葉の説明を行い、次に評弾にとって重要な語である「書」に関わる用語について紹介した(書場、書台、書壇、新書、老書、説書、排書、書目、大書、小書等)。特に王周士の残した書品と書忌については詳しく解説した。

続いて本研究の中心課題である調(流派)について、その源流となる「兪調」と「馬調」の二つの調の特徴を述べ、研究対象とした24の調(蔣調、張調、麗調、琴調、徐調、楊調、巖調、薛調、侯調、尤調、沈調、小陽調、魏調、陳調、兪調、祁調、夏調、翔調、香香調、小飛調、周調、姚調、朱耀祥調、李仲康調)を提示した。これらは『弾詞流派唱腔大典』(中国唱片上海公司出版、2004年/CD26枚組)に収録されたものである。さらに上海市文化広播影視管理局編『評弾』(上海文化出版社、2011年)に記載された文章をもとに、各調の特徴をまとめ、音源を聞きながら代表的な調の特徴を参会者とともに確認した(兪調→蔣調→張調→麗調→琴調→徐調)。最後に、蔣月泉(蔣調)の《戦長沙》の数字譜とそれを五線譜化した楽譜を見ながら、蔣月泉の演奏を聞いて蔣調の特徴を再確認した。

現時点での結論として「評弾における『調』及び『流派』の概念は、伝承者によってしっかりと受け止められ、今日まで伝承されている」

「1950年代以降、新たな『調』は認められていない」という2点を挙げた。今後の課題としては「『調』を認知するための方法を確立すること」「近代から現代にかけて、評弾の演奏様式がどう変わったかを検討すること」「歴史的音源を基にした弾詞の演奏様式に関する比較分析を行うこと」が残った。

(本発表は 2009～2011 年度に科学研究費の補助を受けて行った「東アジアにおける語り物音楽の伝承並びに声の技法に関する比較分析研究」の研究成果を公表するものである。)

(垣内 幸夫 記)

〈報告〉

本発表は中国の語り物の一つ、評弾についての調査報告であった。評弾は三絃または琵琶を伴奏とする語り物で、いつごろ始まったかは定かではないが、18世紀ごろに活躍した王周士という芸人が皇帝の前で評弾を演奏したことが言い伝えられている。主に蘇州で行われていたが、近現代では上海で特に盛んに行われている。

発表者がこの評弾において特に注目したものは「調」と呼ばれるもので、これは西洋音楽と同じような「調」ではなく、個人の演奏様式、あるいは流派を指すものだという。「調」はもともと源流となる二つ「兪調」「馬調」があったが、現在伝承されている「調」はおおよそ二十数個である。いくつか音源例が紹介されたが、様々な声の技法の違いがいくらかは聞き取れた。ただ発表者によると、ある曲が特定の「調」を用いるとわかっていても、実際にそれを音で判断するのは相当に難しいことだという。そうした状況を踏まえつつ、発表者は「調」が評弾の伝承の中で重要な役割を果たしていることを現時点でのまとめとし、伝承における「調」の変遷を今後の課題として発表を締めくくった。

発表後の質疑では、発表者が示したそれぞれの「調」の説明について、実際の音と「調」についての言説を分けて考える必要があるのではないかといった指摘の他、台本の有無についての質問が出た。また、義太夫節やパンソリと同じようなおおまかな演奏様式の違いがあるかなどの質問がでた。発表者はこれまで東アジアにおける語り物の比較研究を行ってきており、今回の発表もその一部を成すものといえる。発表を聞く限り、確かに評弾は義太夫などとも比較出来そうだが、筆者にとっては、評弾という芸能の拡がり、奥行きを捉えることだけでも十分に魅力的な研究であるように思えた。

(藺田 郁 記)

\* \* \* \* \*

東洋音楽学会西日本支部 第259回定例研究会

日 時：2012年12月15日(土) 13:30～17:00

場 所：国立民族学博物館(民博) 第6セミナー室

例会担当と司会：寺田 吉孝(旧支部委員)

### 《パネル・ディスカッション》

八代妙見祭のチャンメラの復元製作をめぐって

1. チャンメラを作る 笹原 亮二(非会員・民博)
2. チャンメラの唱歌 寺内 直子(神戸大学)
3. チャルメラ系楽器の分布と演奏の場 寺田 吉孝(民博)
4. 芸能の映像記録とその活用について 福岡 正太(民博)

### 〈要旨と報告〉

司会者が述べたように、芸能研究と民族音楽学研究の異分野連携事例は多くない。両領域の歴史や教育体系によるもので、日本だけに特有の現象ではないだろう。本パネルは、民博が参画する人間文化機構連携研究を背景として、民俗学(芸能研究)と民族音楽学の分野横断研究と、伝承現場への研究成果還元・応用を目的とした研究成果の発表であった。日本では必ずしもメジャーな楽器ではないチャルメラを巡り、熊本県八代市の八代妙見祭(国指定重要無形民俗文化財)で使用されるダブル・リード楽器チャンメラを事例として、楽器受容史、音楽図像学、世界的な楽器分布、伝承の映像資料化、研究成果応用の観点から、聴衆も積極的に参加して考える良い機会であった。報告者は以下の諸発表から、研究者間および研究者と伝承現場による「協働」の音を聴いた。

笹原は、八代妙見祭のチャンメラの動画をはじめ、チャルメラ演奏が存在する(推定する)日本の獅子舞などに関する絵画資料を紹介した。チャルメラの使用例として、八代・天草地域の獅子舞、江の島天王祭や鎌倉円覚寺の唐人囃子、江戸時代の都市祭礼、朝鮮通信使を示した。その後、民博での展示用チャンメラの製作過程を紹介した。国内では現在製作されていないため、楽器メーカーではない木工・金工技術者との連携が必要であったとの報告である。

寺内の発表は、妙見祭で秘伝とされた古譜(江戸時代後期成立と推定)

の解読に関するもので、謎解きのスリルと研究者の伝承現場への寄与について考えさせるものであった。チャンメラや太鼓を含む囃子の古譜の読み方が失われて伝承者の数も減る中、伝承者からの依頼に基づき解読が開始された。唱歌を記した譜を、雅楽専門家の知識を活用して解読する試みであった。発表は解読の中間報告であったため、聴衆からは様々な解読のヒントとともに、最終的なリアリゼーション提供の希望が出された。再現演奏がどこまで可能か、今後の進展に期待したい。

寺田は、民博の新しい楽器展示プロジェクトの成果として世界におけるチャルメラの分布を示し、円錐形胴体を持つダブル・リード形チャルメラが一般的に屋外で演奏されること、またその演奏の文脈が 1. 宗教儀礼、2. トランス、シャマニズム、3. 人生儀礼、4. 軍楽、5. 武道、スポーツ、6. 演劇であると整理した。また一般的に、チャルメラ奏者の社会的地位が比較的低く、男性が多いことにも触れた。また世界のチャルメラ系楽器のモノグラフが少ないこと、歴史研究の欠如も多いことに触れ、複数研究者の共同プロジェクトによる解決が必要であると提起した。聴衆からは、芸術音楽での使用例についても研究を進めるべき、との意見が出た。

福岡は、本研究発表の背景となった民博の「文化資源プロジェクト」の成果である笹原亮二編『チャンメラを作る』(DVD付)の収録映像について、演奏現場での撮影(オリジナル文脈、抜粋)、劇場舞台での演奏(全演目かつ音が明瞭)、スタジオでの楽器デモンストレーション(復元楽器とオリジナル楽器の比較)、比較映像(他のチャルメラ演奏例)、画像など(世界におけるチャルメラ系楽器の分布)から成る、複合的構成により芸能を映像化したことを説明した。芸能映像の目的については、映像記録(復元目的)、再現(研究目的)、表現(演奏の一部)の3つの視点の中で考察することが重要だとの指摘を行った。伝承の外部者と内部者の映像の見方についても、前者が映像を一般化された演技として見るのに対し、後者は特定の場所と時における一回性を持つ演技として意識しながら、映像に映った社会関係に着目することも指摘した。撮影結果を現存する伝承に資するものにするため、芸能をめぐる人々の営みの中に映像を位置づけることが、1つのあり方であるとの提言が行われた。研究者による映像制作だけでなく、手軽な映像制作ツールが一般化した現在、

伝承者が制作する映像も研究の視野に入れる時代も近づいていると、報告者は考える。

(小日向 英俊 記)

\* \* \* \* \*

### ■入会申し込み・住所変更について

(一社) 東洋音楽学会への入会をご希望の方は、80円切手を同封し、下記の学会事務所へ入会案内・申込用紙をご請求ください。申込用紙は、ホームページからもダウンロードできます。会員の異動や住所変更等についても、下記の学会事務所へお知らせください。申し出先は支部事務局ではありませんのでご注意ください!

一般社団法人 東洋音楽学会 学会事務所  
〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号室  
TEL 03-3832-5152, FAX 03-3832-5152  
ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog>

### ■研究発表の募集

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、FAX、E-mail)を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

東洋音楽学会 西日本支部事務局  
〒565-8511 吹田市万博記念公園10-1  
国立民族学博物館 福岡研究室気付  
TEL 06-6878-8351, E-mail [fken@idc.minpaku.ac.jp](mailto:fken@idc.minpaku.ac.jp)

---

### 支部だより 第74号

発行：東洋音楽学会 西日本支部 担当：今田 健太郎、北見 真智子  
〒565-8511 吹田市万博記念公園10-1  
国立民族学博物館 福岡研究室気付  
TEL 06-6878-8351, E-mail [fken@idc.minpaku.ac.jp](mailto:fken@idc.minpaku.ac.jp)